Osaka University Knowledge Archive

Title	乳癌皮膚並に琳巴腺轉移のレ線治療に就て
Author(s)	貴家, 貞而
Citation	日本医学放射線学会雑誌. 1952, 12(7), p. 3-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/18545
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

乳癌皮膚並に淋巴腺轉移のレ線治療に就て

東北大學醫學部放射線醫學教室(主任　古賀良彦教授)
貴　家　貞　而

(昭和27年2月10日受付)

内　容

I　緒　言
II　當教室の治療術式
III　治療成績
(i) 推計方法
(ii) Iセリーの效果
(iii) IIセリーの效果
(iv) 二次的再發とその治療效果
IV　考　按

I　緒　言

乳癌のレ線治療に關しては既に Seitz-Wintz, Kieler, Finci, Holfelder, Hintze, Pfahler, Lee, Schinz 等の報告があるが何れも遠隔成績に就てゞあつて個々の轉移巢に對する效果，即ちレ線放射に依る一次治癒に關する推計的考察は見當らない．余は手術せる乳癌に發生した轉移の中，特に皮膚並に淋巴腺轉移に對するレ線治療の效果を昭和17年5月より昭和22年8月迄の當科入院患者に就て調査したので之を報告する．

II　當教室の治療術式

先ず轉移癌に就ての當教室の治療術式を述べる．轉移の有無に拘らず通常胸部の中央は健側胸骨緣迄，外側は患側腋窩線迄，上方は鎖骨上窩部迄，下方は肋骨弓迄の領域を數放射野に分け此の中鎖骨上窩部及び腋窩部には深部治療を，その他は表在治療にて1回放射量250～300r を隔日毎に放射し，轉位の有無，大さ，數などに應じ總量1500～3000r を放射して一系とする．轉移が之以外の部位にある時，豫防放射を行う時は適宜放射野を設定して前述と同樣の放射を行う．各放射野を順次放射し終ればIセリーとし1～2カ月毎に來診させ，轉移の狀況，二次的再發を監視し，尙治療を要するものはIIセリーを行う．

III　治療成績

(i) 推計方法

此の報告に於ては昭和17年5月より昭和22年8月迄の當科入院患者の中皮膚又は淋巴腺轉移を證明し之にレ線治療を行つた36名に就て此の轉移が放射に依て如何に變化したかをその大さの變遷及び二次的再發の時間的消長の面より放射野毎に觀察した結果に就て述べ生存期間其の他に就ては觸れぬ事にした．

第1表　放射野區分と經過判定

i) 放射野區分

轉移の種類	放射野番號	部　位
皮　膚	I	患側前胸部
〃	II	健側前胸部
〃	III	患側々胸部
〃	IV	背　部
〃	V	その他の皮膚轉移を起せし部
腺	VI	患側腋窩部
〃	VII	〃 鎖骨上窩部
〃	VIII	健側腋窩部
〃	IX	〃 鎖骨上窩部
〃	X	その他の腺轉移を起せし部

ii) 經過判定

略號	轉移の經過	判定
―	放射に依り轉移の消失せるもの	消失
±	〃　著明に縮少せるもの	輕快
＋	〃　中等度に縮少せるもの	
＋＋	〃　稍ゝ縮少せるもの	
＋＋＋	放射するも轉移の不變のもの	未治
×	放射に依り輕快消失するも再び增大せるもの	

皮膚轉移と淋巴腺轉移の區分は第1表の如く放射野I～Vに生じたものを皮膚轉移とし，VI～Xの部に生じたものを腺轉移とした．そのレ線治療の效果を轉移の消失及び縮少の程度に從い第1表の如く5段に分け，著明及び中等度に縮少したものを輕快，稍ゝ縮少，不變及び增大を未治と判定した．觀察期間は放射終了1週後より6カ月迄のものに及んだ．

(ii) Iセリーの效果

皮膚及び腺轉移の治療經過は第2表の通りであ

第2表 Iセリー治療經過 A皮膚轉移(1)

症例	放射野番號	轉移の大さ	轉移の數	放射量 r	放射終了後の經過								
					1週	2週	3週	1カ月	2カ月	3カ月	4カ月	5カ月	6カ月
1	I	鶯卵—胡桃	2	2000	+	±		—					
2	I	胡桃	1	1200	++								
3	I	鶯卵	1	3000		++	++	+					
4	I	手拳	1	2100	—								
〃	I	小指	數	2100	—								
〃	IV	小指—米粒	數	1500					±				
5	I	示指	1	1800			++		—		—		×
6	II	拇指—米粒	數	1500	+				+				
7	I	米粒	1	2100		—							
8	I	示指—米粒	數	2100	++								
9	I	鷄卵	1	1500		±							
10	I	小指—豌豆	2	1500				—					
〃	III	小指—豌豆	數	1500				+					
11	I	拇指—米粒	數	2100	+								
12	I	米粒	數	3000					±				
13	I	米粒	數	2000							—		
14	I	小指	2	1500	—								
〃	II	小指—米粒	數	2400	—								
〃	IV	小指	2	1800	—								
15	I	小指	1	3000				+					
16	I	小指	1	2100			+++						
17	I	豌豆—米粒	數	2100								—	
18	I	鶯卵—豌豆	2	1800		±			—				
〃	I	鷄卵—豌豆	2	3000		±			—				
19	I	鷄卵—小指	3	3000			++			—			
20	I	小指—豌豆	數	1900	±	—							
21	I	米粒	3	2000	+		—						
22	I	豌豆	1	1400		++						—	
23	I	胡桃	1	2500				—					

B 腺 轉 移(1)

症例	放射野番號	轉移の大さ	轉移の數	放射量 r	放射終了後の經過								
					1週	2週	3週	1カ月	2カ月	3カ月	4カ月	5カ月	6カ月
2	VI	豌豆	1	750	+								
3	VI	鶯卵	1	3000	++								
〃	VII	拇指	3	1500	+++								
4	VII	米粒	數	3000	±				±				
6	VII	鷄卵	1	1800	++				—				
7	VII	小指—豌豆	數	3000			—						
9	VII	示指	1	1500					—				
10	VII	鶯卵	2	1800				++					
11	VII	小指	3	2400	+++								
14	VI	豌豆	數	1800	+++								
15	VI	胡桃	1	3900		+		—					
16	VI	小指—豌豆	數	2100			+						
〃	VII	豌豆	1	1000			—						
17	VII	豌豆—米粒	2	2700	±								
18	VI	胡桃—豌豆	數	2000		±							
20	VI	小指	1	1500		+				+			
〃	VII	豌豆	3	1500	±	±				±			
〃	VIII	胡桃	1	2000	+	+							
22	VII	鶯卵	1	2300	++	+	±	±					
23	VI	米粒	3	1200	+			—					
〃	VIII	豌豆	1	2100				+++					
24	VI	胡桃	1	1500					+++				
〃	VII	鶯卵	1	1800					+				
〃	VIII	手拳	1	2200	++	+	±		±				
〃	IX	拇指	2	1800					+++				

腺　轉　移(2)

症例	放射野番號	轉移の大さ	轉移の數	放射量 r	放射終了後の經過 1週	2週	3週	1カ月	2カ月	3カ月	4カ月	5カ月	6カ月
25	VIII	小指—豌豆	2	1500			−				×		
26	VII	米粒	數	2100	−								
〃	X	拇指	1	2100				±					
27	VII	小指	數	2100		+							
28	VI	豌豆	1	1500	−								
〃	VII	豌豆	3	1800	−								
29	VI	拇指	1	2100			+					±	
〃	VII	鷄卵	1	3000	±							±	
〃	VII	小指	數	2400			−						
30	VI	示指	1	3000				+		−			
〃	VII	小指	1	3000				+		−			
〃	IX	小指	1	2400				−					
31	X	鷄卵	2	3000		+		±					
32	VII	豌豆	1	2100	++								
33	VI	豌豆	1	2100	++								
〃	VII	豌豆	1	1200	−								
34	VII	豌豆	1	1200					−				
〃	VIII	鷄卵	1	2400					±				
35	VII	豌豆	1	1800				++			−		
36	VI	手拳	1	2000	++				+		+		±
〃	VII	小指	1	1000	−								
〃	IX	小指	1	1000	−								

第3表　Iセリーの效果

效果＼經過＼轉移の種類	1週後 皮膚	1週後 腺	1カ月後 皮膚	1カ月後 腺	3カ月後 皮膚	3カ月後 腺	6カ月後 皮膚	6カ月後 腺	總例 皮膚	總例 腺
消失	5	6	6	7	4	5	4	2	19	20
輕快	5	7	6	13	3	7	0	3		
未治	2	10	4	3	0	2	1	1		
例數	12	23	16	23	7	14	5	6	29	47

りその效果を總括して見ると第3表の如くなる.

即ち皮膚轉移は6カ月間の經過中に總放射野例29例中19例(65.5%)が消失して居り，その內譯を見ると放射終了1週後にはその時調べた12例中5例が消失し，1カ月後には16例中6例が，3カ月後には7例中4例が，6カ月後には5例中4例が夫々消失している.

一方淋巴腺轉移は6カ月間に總放射野例47例中20例(42.6%)が消失して居り，その內譯は放射終了1週後には23例中6例が消失し，1カ月後には23例中7例が，3カ月後には14例中5例が，6カ月後には6例中2例が夫々消失して居る. 即ち皮膚轉移の方が腺轉移より早期且つ顯著に消失に向うようである.

尙第3表に示す通り消失に迄至らない轉移も大多數が縮少，輕快して居り，又一旦消失した轉移か再び增大したものは皮膚及び腺轉移に各1例認められたに過ぎなかつた.

iii) IIセリーの效果

Iセリー放射數カ月後轉移が縮少したが尙消失迄至らなかつたもの，及び再び增大した前記2例にIIセリーを行つた. 此は4名，放射野5例中皮膚轉移1例，腺轉移4例であつて，その治療效果を調べると第4表の如くなる.

第4表　IIセリーの效果

症例	轉移の種類	放射野番號	轉移の大さ	轉移の數	Iセリーの放射量 r	Iセリーの效果	放射休止期間 月	IIセリーの放射量 r	IIセリーの效果
5	皮膚	I	示指	1	1800	×	6	3000	3カ月後消失
26	腺	VII	米粒	數	2100	×	4	2400	2週後消失
20	〃	VI	小指	1	1500	+	3	1000	2カ月後消失
〃	〃	VII	豌豆	3	1500	±	3	1000	2週後消失
29	〃	VII	鷄卵	1	3000	±	5	3500	1週後消失

即ち全例に於てIIセリー終了1週乃至3カ月後に轉移が消失しその效果が認められ，皮膚及び腺轉移間に效果の差を認める事が出來なかつた．

iv）二次的再發とその治療效果

次に轉移の治療中に二次的に皮膚又は淋巴腺に再發を起した10名に就て調べると第5表の如く

第5表　二次的再發とその治療效果

症例	轉移の種類	再發部位	その部位に既往に放射の有無	Iセリー後再發迄の期間　月	再發巢の大さ	再發巢の數	放射量 r	效果
7	皮膚	V	—	1	小指—豌豆	數	2100	1週後消失
13	〃	I	—	5	豌豆	1	2700	2カ月後消失
18	〃	IV	—	3	豌豆	數	1500	2カ月後消失
〃	〃	V	—	3	豌豆	2	1500	2カ月後消失
25	〃	II	—	1	小指	1	1500	1カ月後消失
7	〃	V	—	2	米粒	數		
8	〃	V	—	1	米粒	3		
11	〃	V	—	7	米粒	數		
12	〃	V	—	2	米粒	3		
20	〃	V	—	4	豌豆	2		
〃	〃	V	—	4	米粒	數		
25	〃	V	—	7	豌豆	數		
〃	〃	V	—	7	豌豆	1		
〃	腺	IX	—	3	小指	1		
26	〃	VIII	—	6	鷄卵	1		
31	〃	VII	—	3	胡桃	1		

再發部位は16例でその中皮膚轉移が13例，腺轉移が3例である．之等は何れも以前に放射を行わなかつた所であつてIセリーで放射した部位には再發を起して居らない．此の中4名（放射野は5例で何れも皮膚轉移である．）に前記と同樣なレ線治療を行い，全例に於て放射終了1週乃至2カ月後に再發癌が消失して居る．即ち二次的再發は以前に放射した部位に起らず，放射しなかつた部位にのみ現れ，そのレ線治療は全例に於て效果が認められた．此の效果に皮膚及び腺轉移間に差があるか否かは後者の治療例がない爲不明である．

IV　考　按

以上述べた事實より余は次の如き可能性に就て根據が得られたと思う．

1．手術した乳癌の皮膚並に淋巴腺轉移に對してレ線治療は卓效を呈する．

2．此の際皮膚轉移の方が腺轉移よりも早期且つ顯著に奏效するように思われる．

3．Iセリーで尙消失しない轉移及び二次的に生じた再發癌にもレ線治療は有效である．

4．Iセリーで消失した轉移の再發を見ることは少なく且つ以前に豫防放射した部位には數カ月の觀察では1例も再發を見ない．